

(4) 同人誌活動

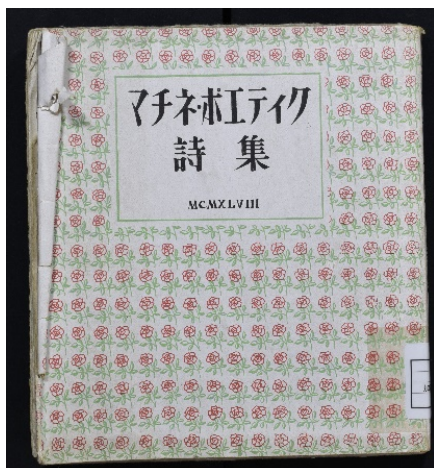


加藤は第一高等学校時代に校内誌『校友会雑誌』の編集委員を務め、寄稿したのは『校友会雑誌』や寮内新聞『向陵時報』だった。前述の通り『崖』（下写真）に

寄稿しはじめたのは浪人時代である（「春日抄」39年6月、「窓」39年10月）。また『山の樹』にもカロッサやリルケの翻訳を載せたが（40年1月、同年2月）、これも浪人時代のことである。



大学に入学してから発表した作品はむしろ少なくなり、『崖』や『四季』に発表した「旅行に就いて」、「牧場について」、そして「物象詩集に就いて」がある。『四季』は堀辰雄・三好達治が中心となった同人誌である。



このほかにあまり知られていないが、東京帝国大学医学部昭和十五年会が主宰した『しらゆふ』（漢字表記すれば白木綿、左上写真）という学生同人誌があり、この同人誌に加藤は3回寄稿した。すなわち「倦怠に就て」、「嘗

て一冊の「金槐集」餘白に「頌」（ピエール・ルイス論）である。

同人誌に発表した作品を見ると、詩歌あり、小説あり、翻訳あり、評論あり。後年の加藤の活動領域と同じく幅広さをもっている。（前頁左写真：『マチネ・ポエティック詩集』の表紙）